

記念誌 「相中相高八十年」 ” 思い出の記 ” より

思い出の六年間

高普第 2 回卒 菊地 邦雄 (※1)

昭和十八年、小学校六年生の時である。中村第一小学校の二階の校舎より、戦闘帽に背のうを背負い、木銃を肩に「万葉の桜か襟の色」と声高らかに隊列をくんで行進していた相中生のカーキ色を見た時、早く相中に入って、あの隊列に加わりたいたいという気持ちが幼な心をおどらせていたものだ。

だから、相中に入学して、ゲートルをまき戦闘帽をかぶった時の嬉しさは忘れられない。用もないのに外に出ては、上級生に対して挙手の敬礼をしたものだった。当時は上級生と下級生の区別はやかましく、一年生などは、四年生、五年生の教室の前をうろつくことはできなかった。だが幼い犬が冒険心をだすのと同じように、ある日、私は五年生の教室の前の廊下を往復してみた。途端に一喝、五年生の教室につまみ入れられてしまった。さあそれからが大変、静坐をさせられお説教、あげくのはてに、姉さんがいるかの質問。私は完全に泣き顔であった。その時、話を聞きつけて剣道部の先輩が部員だからと云うことで私をひきとりにきた。まさに地獄で仏に会ったというのはこのことかも知れない。

昭和二十年、上級生は学徒動員で横浜や郡山に、私達は松根掘りや松川の塩田作業に従事するようになった。夜は、空襲警報のサイレンがなるごとに学校にかけつけ、防火態勢をとった。仙台空襲の時は、相馬上空を B29 が編隊をくんで通りすぎたあと、学校の屋根より仙台方面に火の手がみえたのが今でも瞼の底にのこっている。八月十五日、学校の財産を山上小学校に運んだ時、そこで天皇の玉音をわけのわからないまま聞いて、あとで先生から戦争が終ったと知らされた。重い荷物を汗をかきかき山上まで運んだのが、何となく拍子ぬけしてしまったような感じだった。

終戦から一年すぎた中学三年の時、父親から、経済的な理由から、中学校を中退するように言われた。心の動揺しやすいこの年代に、親のこの一言は私にとっては大きな衝撃であった。それからというものは、センペイやきや土方人夫など、仕事としてやれるものはすべて体験した。親に経済的な負担をかけるわけにはゆかないので、学資はもちろん教科書代、参考書代まで自力でまかした。これは私にとって一つの大きな試練でもあったが、同時に私の人生観の一部を形成した。労働の貴さ、またこの労働を通して人間はやれば何でも出来るという生きてゆくうえでの自信を学びとったのである。

だが、今思うに、私のこの試練以上に苦悩し、針の筵にすわらされたのは終戦後の先生達ではなかったろうか。軍国主義の教育方針が終戦と同時に崩壊し、暗中模索のなかに平和的な教育が要求されたからである。経済生活が破壊され、思想が混乱するなかで、あるいは方々にひろまる学校ストのなかで、先生方は生徒を指導する教育理念をさがしていたことは事実であろう。

苦しみもあった、悲しみもあった。中学一年から新制高校三年までの六年間、私の人間が形成され、友人関係が形成された時代でもあった。それだけに六年間の思い出は、私の人生のなかで単なる過ぎ去った過去としてではなく、現在も私のなかに人生観の一部として生きている思い出であり、私の子供達に語りつがれてゆく思い出でもある。

(※1) 昭和 25 (1950) 年卒 中村出身